

ライプニッツと「連続体の迷宮」前史

——17 世紀西欧における連続体の合成の問題をめぐる諸説の整理と検討——

池田真治（富山大学）

「連続体の迷宮」は、点あるいは不可分者からいかにして連続体が合成されるかという問題である。この問題は、これまでライプニッツ哲学の形成に深く関わる主要問題として位置付けられてきた。しかしそれは、ライプニッツに固有の問題ではなく、リベール・フロワモンの『迷宮すなわち連続体の合成について』（1631）に見られるように、すでに 17 世紀前半の数学者や自然哲学者において活発に議論されていた（cf. Beeley[1996]）。

この「連続体の迷宮」にライプニッツが対峙するに至った経緯を知る上で、『連続体問題の歴史』と題されるライプニッツ手稿が手がかりとなることが期待されるが、謎めいたテキストであったためこれまで長らく放置されてきた。近年、Palmerino[2016]の研究により、『歴史』がフロワモンの『迷宮』の単なる覚書であり、テキストの大半が『迷宮』からの抜粋にすぎないことが明らかにされた。しかし、そこには独自の書き込みが散見されるだけでなく、ガリレオやデカルト、ガッサンディ、ロドリコ・デ・アリアーガ、ケネルム・ディグビー、トマス・ホワイトなど、『迷宮』には登場しない（そもそも彼らの著作の出版は 1631 年以降なので、『迷宮』には登場しえない）、初期近代の哲学者たちの名も挙げられている。

フロワモンの『迷宮』では、その問題の起源を古代にまで遡り、連続体が無限分割可能であるとするアリストテレス主義の立場から原子論を批判している。そして、13 世紀の唯名論者たちの立場に依拠しつつ、14 世紀に不可分者を支持したウィクリフらオクスフォード学派をとりわけ批判している。また、15 世紀に可能無限だけでなく現実的無限を主張し、連続体が無限個の点から成るとしたジョン・メアや、16 世紀に媒介的不可分者を支持したスアレスなども、同様の立場から否定している。『迷宮』に登場する人物たちのうちには、異端とされ長らく知られていなかったが、初期近代には著作の再版を通じて復興し、新しい機械論哲学を推進し近代科学を形成する上で重要な役割を担った者たちも含まれる。

近年、フロワモンの影響は再評価されつつある（Palmerino[2015, 2016]; Arthur & Ottaviani[2025]）。しかし、初期近代の原子論やスコラ的連続体論、そして不可分者をめぐる数学的・自然哲学的議論やプラトン主義的なモノイド論など、ライプニッツに影響を与えた思想は多様であり、それらの諸立場の相互関係はいまだ体系的に整理されていない。

そこで本発表では、ライプニッツの『連続体問題の歴史』、およびフロワモンの『迷宮』を参考に、17 世紀西欧における連続体の合成の問題をめぐる諸説の整理と検討を行い、その問題の構図を再構成する。またその際、初期ライプニッツがどのような思想潮流を受容したのか、Beeley[1996]や Mercer[2001]らの研究を参考にする。むしろ、ライプニッツはそれまでの様々な諸説を受容したのであって、それらはあまりにも膨大なため、そのすべてを検討するわけにはいかない。再構成にあたって、とりわけ重要な人物や独自の論点にしぼり、できうる限り単純化することを試みる。そのことにより、部分的にでも、ライプニッツが「連続体の迷宮」へと導かれた哲学的動機と思想的文脈を明らかにする。